Funehiki High School News　vol.105

◆入学おめでとう

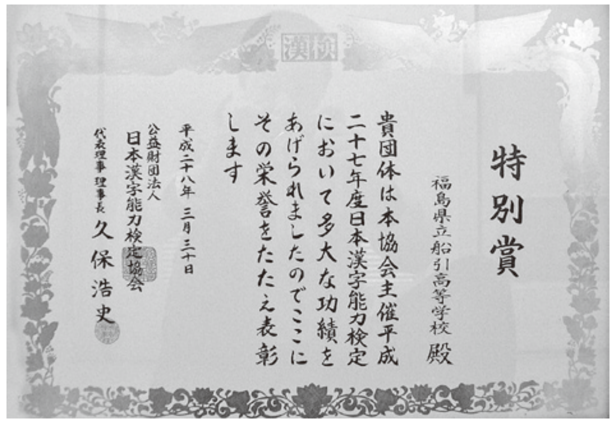
平成２８年度の入学式が４月１１日に行われ、普通科１２０人の入学が許可されました。新入生達はやや緊張した面持ちで式に臨み、高校生活への希望を新たにしていました。

石井紗弥香さん (岩代中出身) が、「これから仲間たちとともに、勉強や部活動に励むことができるのはとても幸せなことだと思います。船引高校生としての誇りと責任を持ち、校訓である「自律」を胸に刻み、社会に貢献できる人間になれるように頑張りたいと思います」と、新入生を代表して誓いの言葉を述べました。

▶誓いの言葉を述べる石井紗弥香さん

▲一学年担任・副担任紹介

◆漢字検定「特別賞」受賞



特別賞

福島県立船引高等学校 殿

貴団体は本協会主催平成二十七年度日本漢字能力検定において多大な功績をあげられましたのでここにその栄誉をたたえ表彰します

平成二十八年 三月三十日

公益財団法人 日本漢字能力検定協会

代表理事 理事長 久保浩史

▲特別賞賞状

平成２７年度に実施した漢字能力検定において、本校が「特別賞」を受賞しました。

この特別賞は、最優秀団体賞・優秀団体賞・奨励賞の受賞団体を除き、特筆すべき功績をおさめた団体に送られる賞で、平成２７年度に漢検を実施した 21,761 団体の中から 100 団体だけに与えられたものです。

本年度も全学年で漢字検定に挑戦します。

既に３級に合格している生徒がほとんどで、上位級取得を目指して日々学習に励んでいます。

◆対面式が行われました

４月１２日、新入生と在校生との対面式が行われ、生徒会長の吉田公幸さんが在校生を代表して歓迎の言葉を述べました。

これに対し、新入生を代表して橋本徳義さん (船引中出身) が「勉強と部活動の両立を目指し、高校三年間で自分を磨いて大きく成長したいと思います」とあいさつしました。

▲笑顔を交わす橋本徳義君 (左) と吉田公幸君 (右)

福島県立船引高等学校　Tel…0247-82-1511　Fax…0247-82-5233
HP…http://www.funehiki-h.fks.ed.jp　mail…school@funehiki-h.fks.ed.jp

海を越えて
英語指導助手
ペンリレー
No. 35

田村市を歩く

Celeste Hidey
セレステ・ハイディさん
(アメリカ合衆国
オハイオ州出身)

空にゆったり浮かぶ雲の合間から太陽がのぞき、風が木々の間を軽く舞っています。緑の小さな苗が点々と並ぶ水田の表面に、かすんだ青い光が射し込みます。この長い一直線の苗の列を作り出すのに、どれほどの労力が注がれたことでしょう。

私の足は、土や砂利をこすりながら、目的地に向かって進み続けます。

素晴らしい春の一日。

毎日、陽の射す時間が長くなっています。太陽は、これから春から夏にかけて楽しい出来事がたくさんあることを、そっと教えてくれているのでしょう。ふと周りを見てみると、多くの人が一日を忙しく過ごしています。でも私は、ほとんど何も入っていない軽いリュックを背負って、市内や周辺をゆっくり歩き回っています。一日を急がないで過ごそうと心に決めているのです。

散歩をする時はいつも、田村市で過ごしてきた時間を思い返します。田村市に来てから６年が過ぎましたが、今でも驚くことがあります。歩くというありふれた行為を、面倒なことではなく、特権とさえ感じるようになったことです。市内ならばどこへでも、自分の足で歩いて行きます。最も簡単であたりまえの行為の中に、価値と快適さを感じるのです。20 歳のころの自分を振り返ると、目的地には車で行きたい気持ちを抑え切れずにいました。その後、日本に来ることになって環境が変わり、私をどこへでも連れて行ってくれた車を手放して、ようやく“いつも急ぎ・いつも忙しい生活”から解放されたのでした。

田村市での最初の１、２年は、自立と自活のために「車があれば…」と、特に冬にはよく思ったものです。しかし、アメリカで冬に友人と車で旅行した時の危険な経験を思い出し、車を運転することではなく歩くことが特権なのだと気付きました。車を運転していると、自分の周りに何があるのかほとんど分かりません。顔や髪をなでるそよ風を感じたり、木々の上でさえずる鳥の声をじっくりと聞くこともできません。車の中では、室温やＢＧＭを操作することができます。自分が環境の管理者です。車の中の空間を支配する女王になることができます。しかし、歩く時に自分が支配できるのはただ一つ、自分が行きたい場所に着くまで、片方の足をもう一方の足の前に出す動作を繰り返すことだけです。

私は歩き続けています。野原を通り、あぜ道へ近道をしました。ゆっくり歩いていると、私の影がついてくるのが見えます。一人ではなく、他の誰かと一緒に歩いているようです。水田から小さな声が聞こえ、私は足を止めました。秋に豊かな実りをもたらす清らかな水を住みかにしているカエルが、私を歓迎する鳴き声です。夏はすぐそこまで近づいているようです。

私は深呼吸をして、再び歩き始めました。この青空の下にいる自分は、どれほど恵まれていることでしょう。この美しい日を、私はじっくり楽しんでいます。私はリュックを背負い直し、目的地のお店で何を買おうか考えます。お店が近づくにつれて、木々や草花は金属やコンクリートに変わっていきます。お店の駐車場へ入り、整然と駐車された車の列を通り過ぎる時、私は歩くことの素晴らしさを再び考えました。車を運転することではなく、歩くことこそが、私に自由を感じさせてくれるのだと。